

取組：児童生徒の発信力強化のための英語指導力の向上に資する取組

当該地域の特性等を踏まえた課題分析の視点

- ア **小・中・高等学校連携強化における課題**：英語教育に関する小・中学校との連携に取り組む高等学校の割合は18.8%（令和元年）と低く、新型コロナウイルスの影響を受け9.3%（令和2年度県独自調査）と更に低下しており、各段階における学習の成果を円滑に接続させるための環境が整っていない。
- イ **新学習指導要領の円滑な実施に向けての課題**：小学校外国語授業に不安を抱える教員の割合（40%）、中学校・高等学校におけるCAN-DOリストの形式による学習到達目標の整備状況（中学校：公表19%把握41% / 高等学校：公表43%把握71%）から、小学校外国語授業の充実に向けた教員への支援、中学校・高等学校における目標に準拠した指導と評価の一体的な改善に資する支援が不十分である。

Plan

※新型コロナウイルス感染症拡大防止、働き方改革等の観点から、オンラインやICTを積極的に活用し、その効果についても検証する。

■取組計画

- ア 小・中・高等学校連携強化における課題に対する対策
児童生徒の発信力強化のための英語指導力向上事業
- イ 新学習指導要領の円滑な実施に向けての課題に対する対策
 - (ア) 外国語教育推進教員養成研修
 - (イ) 「主体的・対話的で深い学び」の視点による英語授業改善のための研修
 - (ウ) パフォーマンス評価の質的改善のための研修

■体制

小・中・高等学校の英語担当指導主事（県教育委員会、教育事務所、総合教育センター）により構成される「英語教育改善プラン推進委員会」を設置し計画を推進。

Do

【取組例1】ア児童生徒の発信力強化のための英語指導力向上事業

県内2地区に各段階で研修協力校（計6校）を設定し、協議会を通して相互理解を図るとともに、地域が連携して育成を目指す資質・能力のテーマ化、小・中・高等学校がつながるCAN-DOリストの作成等に取り組んだ。外部専門機関からの指導・助言を受けて英語授業改善を進め、研修成果を公開授業研修会にて普及した。

小・中・高等学校連携CAN-DOリスト

【取組例2】イ(ウ)パフォーマンス評価の質的改善のための研修（オンライン3回シリーズ）

新学習指導要領の各科目の目標への理解と、本県がこれまで取り組んできたCEFR/CEFR-Jを参考にしたCAN-DOリストに準拠した指導と評価の一体的な改善をより確かなものとするため、外部専門機関との連携により、理論編としてCEFRについて学び専門的な知識を高めた。実践編では、全ての公立高等学校が実施・提出したパフォーマンステストについて理論編に基づく分析*を得ることで、テスト作成のポイントを学んだ。

- 第1回（理論編）CEFR改訂のポイント：CEFR Companion Volumeの概要を学ぶ
- 第2回（実践編1）CEFRに基づく指導と評価の一体的な改善について：CAN-DOベースの高校英語指導のアプローチ
- 第3回（実践編2）CEFRに基づく指導と評価の一体的な改善について：CAN-DOベースのパフォーマンス評価の在り方

成果の普及

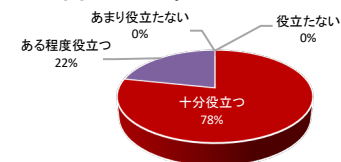
*分析結果はデータベースとして、情報資産分類に基づき、県が管理するドライブにて教員に対してのみ限定共有されている。なお、本事業において作成された指導案やビデオ等の成果物は、成果普及のため県総合教育センターの「授業づくりデータベース」、静岡県「研修管理システム」にて教員に対してのみ共有されている。

Check

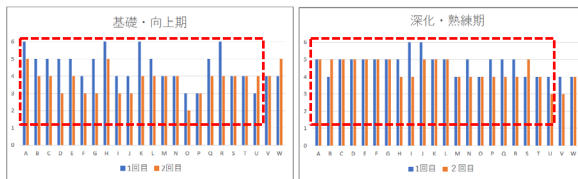
※成果指標に基づく検証結果の一部

- ア 児童生徒の発信力強化のための英語指導力向上事業
 - Q: 英語を通じて、自分の考えや気持ちを伝えようとしていますか。
A 小学校93.1%、A 中学校86.9%、A 高等学校89.2%
 - Q: 授業中の課題は「言い（聞き、話し）たくなる課題でしたか。
A 小学校 そう思う89%
 - Q: 英語を使った活動の時に、分からないことを英語で質問する。
A 高等学校 緊張する61%、緊張しない17%

イ(ア) 外国語教育推進教員養成研修
Q: 研修内容は今後の授業実践や評価につながるものでしたか。



イ(イ) 「主体的・対話的で深い学び」の視点による英語授業改善のための研修
※研修員の授業改善の意識に関する質問(23項目)の研修前後比較



イ(ウ) パフォーマンス評価の質的改善のための研修
※パフォーマンステスト分析 量的まとめ

総合評価	高等学校数
A	10
B	31
C	45
合計	86

Check!

- ア → 研修協力校において、小・中・高等学校の共通テーマである「気持ちを伝え合う」授業が実現できているが、高等学校では話を発展させることに課題があることを確認。
イ(ア)→小学校外国語授業の充実に向けた研修となっていることを確認。
イ(イ)→「基礎・向上期」にある教員は「深化・熟練期」の教員と比べて、研修による意識の変容が大きいことを確認。
イ(ウ)→実施目的がCAN-DO視点であり、かつGEFRA2レベルの英語力を測るのに適したテスト(A評価)実施校が10校に止まることを確認。

課題

研修協力校における、小・中・高等学校の児童生徒の学びについての教員間の相互理解、言語活動の改善が全県の取組となっていない。
※「令和3年度英語教育実施状況調査」生徒の授業における英語による言語活動時間の割合→中学校66%、高等学校51%

Action

ICTの積極的活用を前提とした

新学習指導要領の着実な実施に向け、学び続ける教員の新たな支援体制の構築

- 小・中・高連携事業の体制の刷新
- ペーパーテスト・パフォーマンステストの改善
- 働き方改革を踏まえたオンライン研修の整備
- 自治体連携（アライアンス研修）等



令和3年度中に整備運用したICT機器、アンケート調査結果の活用



新支援体制のイメージ図

課題

- 「伝え合う必然性のある場面」を大切にされた言語活動を設定し、子供が自ら発信しようとする意欲や技能の質的向上を図る。
- 子供自身が「何ができるようになるか」を明確にした上で振り返りを行うことで、学びの充実感や達成感を積み重ねる単元を構想する。

具体的な取組と工夫

①「伝え合う必然性」を明確化

- ・単元を構想する際に、子供が「聞きたいな」「話したいな」「伝えたいな」と感じる思考過程を大切にされた言語活動を設定。
- ・子供がどのような場面で、どのような思いをもち、どのような表現を活用したくなるかを具体的に構想した上で、指導案に「伝え合う必然性のある場面」について項立てし、子供の思考過程を明記。



(2) 必然性のある場面設定

① Final Goal に向けて、導入時に「怪盗Xからの挑戦状」の映像を渡し、単元を通しての目標を明確にしている。「怪盗Xの挑戦状」には、単元の最後の活動が示されており、子どもたちの表現や語句について「もっと知りたい」という思いが高まるだろう。
② オリジナルの町（ドリームタウン）を作成することによって、「その街を案内したい」という思いが生まれ、自分と友達との違いにわくわくしたり関心が高まるだろう。また、オリジナルタウンを使って宝物を隠す活動によって、「どこに隠されているのか知りたい」という思いが生まれ、ペアでのやりとりから道案内の表現や宝の位置を表す単語を聞き取るようとする意欲に繋がるだろう。

②中間評価の充実

- ・言語活動の前後に「中間評価」を構想する。学年ごとの発信力の目標を明確に設定した上で、子供のよいあらわれを適切に評価し、子供の実際のあらわれを友達と共有することを意図的に設定。
- ・「言いたかったけど言えなかったこと」や「工夫したいこと」等、友達とのやり取りで感じた疑問や困り感を共有し、子供たちが主体的に解決することで、自信をもってやり取りができるようにする。

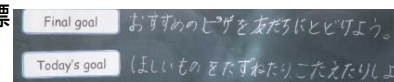


③教員のミニミニENGLISHタイム

- ・週1回短時間の職員研修を設定。Small Talkや慣れ親しむ活動など、外国語活動や外国語の授業で子供が実際に取り組んだ言語活動に挑戦。
- ・授業者として「こんなときは英語でどう言えばよいか」、子供の立場で「こういうことが言いたくなる」「言語材料の多さが気になる」等、具体的な教授法とともに感じたことなどを共有。

④バックワード単元構想シート

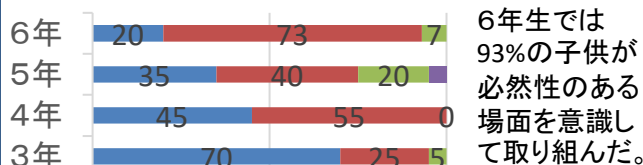
- ・「Final Goal」(単元で何ができるようになるか)から、単元後半→中盤→前半の流れで設定し、子供と目標を共有。



成果

◎必然性のある場面だと感じた子供の増加

◇友達やALTに「伝えたい」「聞きたい」と感じた子供の割合



全学年にて、必然性のあるやり取りが実現した。

◎基本的な語句や表現を活用しやり取りできたと感じる子供の増加

◇既習表現を自分で活用して、友達に質問したり、答えたりできたと感じる子供の割合

3年:85% 4年:81% 5年:100% 6年:77%

●必然性のある場面において、子供が既習表現を駆使して、自分の考えや気持ちを伝えようとする意欲が高まり、多様な言語材料を活用したと考えられる。

課題及び改善案

多様な交流(学校間や海外校等)の充実を図る

- ・友達とのやり取りに関しては、子供は自信をもって行っている。一方、「外国人(友達以外)とやり取りできる」に肯定的な回答をした子供は38%(3年生)、54%(6年生)であった。授業でのやり取りが、本物の会話につながるイメージがない子供も少なくない。ICT端末を効果的に活用し、多様な学校間交流やALTの知人等とやり取りする機会を生かした必然性のある場を設定したい。

課題

- ・単元終了時、英語で何ができるようになっていくかという子供の姿を明確にした単元構想。
- ・児童が思考をする姿を見取り評価すること。

具体的な取組と工夫

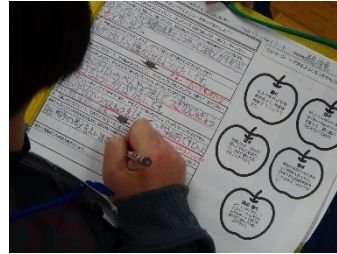
①必然性のある言語活動の設定

- ・児童の思いや考えを伝え合うことができるような目的・場面・状況を明確にした言語活動の設定をする。そして単元において児童が思考する姿を共通理解する。
- ・単元全体の見通しを共有できるような導入になるように工夫する。(目指す姿を教師と児童が共有する)



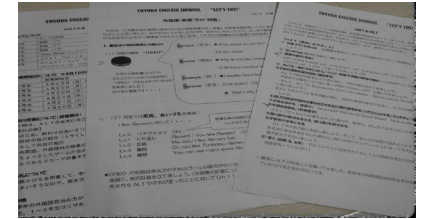
②目標達成に向けた振り返りの充実

- ・児童の良い表れや「言いたかったけど、言えなかったこと」を全体で共有し考える。
- ・常に目標に戻る中間指導を充実させる。
- ・授業終了時、学習の成果や自己課題を実感できるような振り返る時間を設定する。



③資質・能力を育成するための教員研修の工夫

- ・児童と一緒に外国語を楽しもうとする雰囲気を作る。
(English Time, Brush Up研修、English Journal)
- ・外国語授業に対する職員の意識向上を目指す。



成果

◎必然性のある言語活動の設定

- ・単元終了時の子供の姿をイメージした単元を構想することができるようになった。
- ・何のために話すのか、どんな場面なのか、誰に話すのかということを明確にした言語活動を設定したことで、単元の目指す姿に向かって取り組む児童の姿が多く見られるようになった。

◎教師の変容

- ・英語Brush up研修、English Journal等を通して、教師の英語力、指導力の向上を図ることができた。また、教師自身も授業を楽しむことができるようになった。



課題及び改善案

◎必要感のある言語活動の設定

- ・育成したい資質・能力を明確にして、児童の興味関心をさらに高め、「伝えたい」「聞きたい」と思えるような言語活動の設定をする。

◎ICTの効果的な活用

- ・国内外の学校とつながる「本物のコミュニケーション」を目指して、ICTの効果的な活用を考えていく。そのためにも目的・場面・状況の設定を工夫していく。

課題

- 相手の話を聞いて、相手の考えや反応に応じたやり取りをするために、やり取りの内容の質の向上を意識した言語活動の充実を図る。
- 小中高連携・教科横断的な視点を踏まえ、各教科等における対話において、考えを伝え、考えの練り合いを楽しむ子供を育成する。

具体的な取組と工夫

① 帯活動・パフォーマンス評価項目の明確化と共有

- ・単元を構想する際に、相手が言った内容に合った質問や話題を「その場で」考え、会話を広げる言語活動を継続的に設定する。
- ・相手の考えや反応に応じたやり取りについて、想定される子供の姿やよいあらわれを具体的に構想し、子供と共有する。
- ・子供自身が、やり取りの質の向上に向けて自己評価を行い、互いに助言したり共有したりする場を設定する。



② 目標に即した振り返り・自己評価

- ・ペアでの対話や言語活動におけるやり取りを録音・録画し、子供自身が自分のやり取りを振り返る。
- ・振り返る際に、「反応：相手の言葉に応えたり繰り返したりしながら、様々な表現で反応する」「相手：相手が言った内容に合った質問や話題をその場で考え、会話を広げる」等の視点を踏まえ、記録を残していく。

相手	コメント：相手が言ったことを日本語で→それに対して自分がした質問などを表
3	ライブを見に東京へ行きたい→Whose live do you want to watch? / 祖母に会いに名古屋に行きたい→How old is your grandmother? / 牛タンを食べに仙台に行きたい→Do you like beef tongue? / 好きだよ→Like too / 2人ともお家で牛タン食べたことあるよ→I've eaten beef tongue at home with both of them.
3	友だちと会うために大阪に行きたい→Do you like that trend? / 好きだよ→What's good about that trend? / 好きだよ→I like it.
3	アイスを食べるのが好き→That's nice / 時間あったよ→What kind of ice cream do you like? / チョココンポートが好き→I like chocolate compote.
3	スイカを食べるのが好き→Like too / What fruits do you like? / オレンジが好き→I see / 大→心の距離が毎回でいいよ→It's good that the distance is big every time.
3	泳ぐために海に行きたい→Do you like to swim? / 好きだよ→Ok! / 泳がれずに! / 泳がれずに! / 泳がれずに!
4	映画を見に行きたい→What movie do you want to see? / 東京ジレンジャーズを見たい→Like too / 観たいよ→I want to see it.
4	バーベキューをするのが好き→Oh! / バーベキューをする機会があったよ→Do you like meat?

③ 英語科から他教科への広がり

- ・各教科等における主体的・対話的で深い学びの実現に向け、「コミュニケーション力の向上」を視点として、英語科以外の教科等の授業改善に取り組んだ。
- ・「聴く力」「伝える力」を視点とし、授業内で単に自分の考えを伝えるのではなく、相手の意見を聞いた上で自分の考えを伝え、考えを練り合う授業づくりを行った。
- ・月に1回、グループエンカウンターを行う時間を設定し、学級の状況に合わせて取り入れた。



成果

◎ 目標に即した自己評価を行う子供の増加

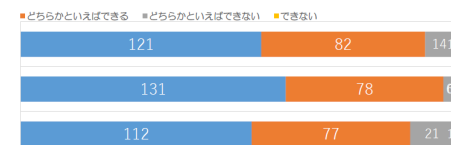
- ◇パフォーマンステストに対する自己評価と実際の得点平均(2年間経年観察)
- 自己評価とテスト得点の差が小さくなり、目標

	2020年度 3年生		2021年度 3年生		2021年度 2年生	
	自己評価	テスト得点	自己評価	テスト得点	自己評価	テスト得点
年度始	2.63	2.23	2.78	1.96	2.92	1.76
1学期	2.37	2.26	2.40	2.32	2.50	2.28
2学期	2.90	2.36	2.74	2.52	3.04	2.96

に即した自己評価を意識する子供が増加した。

◎ 話を聴くことへの意識の変化

- ◇話を聴くときに①相手の表情を見る ②反応する③最後まで聴くを意識する子供の割合



- 英語以外の各教科等においても聴くことを意識する子供が増加した。

課題及び改善案

即興性の高い場面と、相手に即興で対応できる力の育成

- ・やり取りが連続するような会話のパターンでは、話す内容を自分が決める時には相手の言ったことに対応できた。相手の言葉が想定しにくい即興性の高い場面においても、相手の話した内容に応じた質問や考えが伝えられる資質・能力の育成が求められる。即興で伝える必要感のある場面設定を含んだ言語活動の充実を図りたい。

課題

- ・「スモールステップの単元デザイン」をより有効的に活用していくこと。また課題を自分ごとにして思いを英語で表現し伝え合うこと。
- ・ルーブリックを数量的な評価から質的な評価に変えていく。

具体的な取組と工夫

- ①単元デザインの工夫(バックワードデザインの授業設計)
- ・必然性のある場面設定の工夫をする。(何のために伝えるのか、誰に伝えるのかということを明確にする)
 - ・生徒が取り組みたくなるような学習課題を設定し、単元終了時の目指す姿に向かってスモールステップで対話を進めていく。
→「できたところまで話す」ようにする。セルフアセスメントやピアアセスメントとで自己、他者評価をする。
 - ・インプットとアウトプットをつなげるために、毎授業ごと帯活動を充実させる。

- ②目指す姿を明確にしたルーブリックの工夫
- ・評価規準を明確にし、生徒と教師が共有する。
 - ・「自分が話せたこと」「話したかったけど話せなかったこと」を書きためていき、常に目指す姿を生徒と教師で共有していく。
 - ・育成したい能力を明確にした定期テストの作成をする。(単元で育成した資質・能力を測るため、初見の問題を出題したり、題材に関連した話題や形式で出題する)

- ③生徒の意欲を高め、学習を補助するICTの活用
- ・「カメラ機能」を使って音読を撮影し、教師に提出する。
 - ・話すこと(発表)においてプレゼンテーション機能を活用し、聞き手に伝わりやすくする。また録画機能を活用し、自分の発表をより良いものにする。

Unit 6 "Amazing Jobs" の例
Name: _____ Class: _____

Grade 2 "Amazing Jobs!" Assessment

Noting	☹️ - Some effort	😊 - Very good	👍 - Excellent
Speaking attitude 話す姿勢	Does not meet the criteria for ☹️	Can communicate to others what you have researched and when you think about doing ☹️	Can communicate to others what you have researched and what you think in a way that is easily understood by others, using ☹️
	☹️ 内容を話していない	☹️ コミュニケーションがとれていない	☹️ コミュニケーションがとれていない
My English Level 英語のレベル	Can understand everything, pronunciation was okay	Had very good English and pronunciation that made some ☹️	Had very good English and pronunciation, which made very big ☹️
	☹️ すべて理解できず、発音もよくない	☹️ 英語が上手に話せていない	☹️ 英語が上手に話せていない

☹️ Some effort = (授業の目標)を達成し、よりよい努力をしている。 ☹️ Very good = (授業の目標)を達成している。 ☹️ Excellent = (授業の目標)を達成し、ほかに取組んでいる。



成果

◎生徒の変容

- ・目的・場面・状況を工夫することで、生徒の「伝えたい」「聞きたい」という思いを引き出すことできた。

○外国語教育に関するアンケート調査
英語の授業で、自分の考えや気持ちなどを話したり書いたりして伝えようとしていますか？

4: そう思う 3: どちらかといえばそう思う
2: どちらかといえばそう思わない 1: そう思わない

R2 8月上旬	R3 7月末
75.8%	86.9%

◎言語活動の充実

- ・生徒と教師が目標を共有し、同じ見通しをもって目指す姿に向かうことができた。
- ・相手意識が明確になったことで、伝えたい思い・気持ちを表現することができるようになった。



課題及び改善案

◎アウトプットにつながるインプットの工夫

- ・単元終末時における生徒の姿を具体的にイメージし、その姿に向けて必要な表現インプットの活動を工夫していく。
- ・ワークシート等を活用して振り返り、単元終了時の目指す姿につなげていく。

◎場面設定の工夫

- ・「本物のコミュニケーション」を目指して、生徒が自分の思いや考えを発信したくなるような場面設定をさらに工夫していく。

「児童生徒の発信力強化のための英語指導力向上事業」(伊豆の国地区)～静岡県立菫山高等学校～

小・中・高等学校共通テーマ

「聴いてみたい 話してみたい 自分の思いをのびのびと表現できる子」

現状と課題

- 与えられた情報を理解したり、英語を通じて相手の考えや気持ちに耳を傾けて理解しようとする態度は身に付けているが、社会的な話題について、自分の考えを自分自身の言葉で伝える力に課題がある。
- 英語を将来役立つものとして認識できているが、学校教育目標にある「地域及び国際社会で活躍する人材」となるために英語を活用するところまでは至っていない。
- 指導について、即興で概要や要点を捉えたり、即興で自分自身の考えを表現したりする活動に課題がある。

第1回アンケート調査(2021年6月実施)

5件法(1そう思わない～5そう思う) / 対象2年生 n=233 単位%

質問内容	1	2	3	4	5
・英語の授業は好きですか。	4	18	36	33	9
・英語を通じて自分の考えや気持ちを伝えようとしていますか。	4	7	31	41	16
・英語の勉強をすることは将来役に立つことだと思いますか。	3	1	7	15	74
・卒業後英語を使って国際社会で活躍できるようになりたいですか。	6	13	31	28	21
・与えられた話題について、(特に準備をすることなく)「即興で話す活動」をしていたと思いますか。	11	10	23	31	25

研究テーマ

地域及び社会が抱える諸問題について、自分の考えを即興で伝えることのできる生徒の育成

【主な取組】

- 「わかる」から「できる」へ～CAN-DOに基づいた授業改善～
 - ・五つの領域別の言語活動及び複数の領域を結び付けた統合的な言語活動の在り方について
 - ・海外のコースブックを参考にしたタスク中心型の単元構想について
- 「何を知り・何ができるようになるのか」～授業内容の質的向上～
 - ・社会や世界と自分とのかかわりを意識した言語活動の在り方について
 - ・複数の教材の活用方法について(概要や要点の捉え方、即興で話す指導)

今後の課題

- ✓ タスク中心型の授業を実現する教材の作成負担
- ✓ 思考力・判断力・表現力を発揮させた活動における英語の質的高まり
- ✓ 外部指標と相関のある校内指標の設定(CAN-DOの改善)及び指導と評価の一体的な改善
- ✓ 初めての他者と会話を発展させる力の育成

成果

- ・ CAN-DOに基づいた言語活動及び地域及び社会が抱える諸問題について考える話題を設定することにより、英語を使って国際社会で活躍できるようになりたいと考える生徒の割合が49%から52%※とわずかであるが増加した。 ※第1回調査令和3年6月と第2回調査令和4年1月の比較。以下同様。
- ・ 入試を目標とした理解中心の授業展開を見直すことから、英語を「読んで」概要や要点をとらえる活動をしていたと答える生徒は67%から76%、与えられた話題について「即興で話す活動」をしていたと答える生徒は56%から64%と増加した。
- ・ 統合的な活動を増やすことにより、学習目標は情報を得て終わるのではなく、自分自身の在り方や生き方を考えさせる指導を充実させることができた。

課題

- ・授業改善の取組が外国語科の一人一人の教員の個業になってしまう傾向にあり、指導と評価の一体的な改善について教科内カリキュラム・マネジメントが十分に機能していない。
- ・観点別学習状況の評価について、教科としての共通認識の形成が不十分である。
- ・「主体的・対話的で深い学び」の視点における学習過程の質的改善について、教員理解と実践を一層推進する必要がある。

具体的な取組と工夫

- 外国語科の教科研修会の機会を増やし、授業をお互いに見学し、研究協議を行ったり、公開授業用の指導案を教員全員で作成したりする。
- 朝日大学の亀谷みゆき教授を外務専門機関の講師として招請し、校内授業研修会や公開授業研修会等を通して、指導・助言を得る。また、その知見を日々の授業改善に生かす。
- 焼津市立豊田小学校、豊田中学校との合同研修会を開催し、外国語科を通して児童生徒に育成すべき資質・能力の明確化を図る(小・中・高を貫くCAN-DOリストの作成)。また、小学校の教諭が中学校の単元構想を、中学校の教諭が高等学校の単元構想を、高等学校の教諭が小学校の単元構想を行い、資質・能力の系統的なつながりについて理解を深める。

成果

- 外国語科の教員が、小学校、中学校、高等学校の学びの系統性について協働的に学ぶことを通じて、学習指導要領改訂の方向性や理念について理解を深めることができた。
- 外国語科の教員がチームとして課題を共有し、特に生徒の表れ(パフォーマンス)から指導改善につなげていくプロセスが見受けられた。
- 公開授業における亀谷教授からの主な指導・助言は以下のとおりである。
 - ①ゴールアクティビティのやりとりを複数回繰り返しながら生徒がパフォーマンスを向上させていく姿が見られた。評価規準となるパフォーマンスを段階的に示しながら、求めている姿を生徒と教師で共有できると良い。
 - ②生徒は暗記ではなく、自己調整しながら伝えたいことを工夫する姿が見られた。
 - ③中学校における「受信語彙」が高校では「発信語彙」になっていた。
 - ④授業では相手がいるからこそできることを行わせたい。
- アンケート結果より(1学年230人を対象 6月と1月に実施)

平均値に統計的な有意差が認められたのは以下8項目である。内発的動機付けに係る項目(①～⑥)及び即興性(⑦)、技能統合(⑧)に係る項目について進捗が見られた。

 - ①英語を通じて、相手と進んで関わろうとしているか($t=2.78, df=420, p<.01$)
 - ②英語の勉強をすることは将来役立つことだと思うか($t=3.24, df=415, p<.01$)
 - ③高校卒業後に、海外の大学に進学できるようになりたい($t=2.10, df=419, p<.05$)
 - ④高校在学中に留学して海外の高校の授業に参加できるようになりたい($t=2.01, df=411, p<.05$)
 - ⑤海外での語学研修に参加する際にスムーズに開始できるようになりたい($t=3.03, df=410, p<.01$)
 - ⑥海外でのホームステイで、英語で日常的な会話をし、円滑なコミュニケーションができるようになりたい($t=2.81, df=397, p<.01$)
 - ⑦与えられた話題について、(特に準備をすることなく)「即興で話す活動」をしていたと思うか($t=2.66, df=409, p<.01$)
 - ⑧聞いたり読んだりしたことについて、「その内容を英語で書いてまとめ」たりしていたと思うか($t=2.55, df=398, p<.01$)

課題及び改善案

- 教科内で生徒に育成すべき資質・能力を明確化することについて、継続的な取組こそが肝要となる。特に、今後は指導によって生徒の資質・能力のどの部分に伸長が見られたのか、あるいは見られなかったのかについて、データに基づいた検証・改善のサイクルを確立する必要がある。